

た。X氏は、思わず、身振いをして、鏡のなかの顔を左手で撫でてみた。羊のようにやわらかく静かな眼はどこにも見あたらない。もう自分の手で絞め殺してしまった鳶色の眼だった。X氏の顔が蒼白になった。首を左右に振り、俺は、いったい何を生きて来たのだろうと呟いた。背広を着た。左手が自然に雨傘にのびた。朝の路上に出た。

青空だった。光は透明な空気のなかを垂直に降っていた。光の独楽が廻っている。青は宇宙空間にむけて放射状にひろがっている。一切れの雲もない。まったくの夏空だ。今日は、確実に、真夏日になるだろう。これで、勢力を誇ったカビたちも死滅するだろう。雨の季節は終わってしまう。路上には、風に吹きちぎられたおびたらしい木の葉や草きれが死んでいる。光をうけて、草の白い葉身が光っていた。ネズミが、1匹、腹を見せて死んでいる。水溜りがあちこちできらきらと光って眼に眩しい。笑顔から白い歯がこぼれて、物質のように輝やいている。明るい声が飛び交い、久しぶりの、賑やかな朝の駅前広場だ。

——100日だってね、雨

——もう青空は見えないって

——本当に、地球がどうにかなっちゃって気が狂いそうだったわ

——たかだか雨じゃないか

——ふさぎの虫に喰い殺された人もいるかもね

——いったい、何があったのかしら

——本当のことは、誰も知らないでしょう

——今に、発表があるさ

——たぶん、ね

——もう雨はおしまいにもしてもらいたいわ

——原因の探求だけはしてもらいたいな

——犯人を探せて訳かい

——何が起こったか、本当は、みんな知っているのさ、自分の眼で見たからね

——異常よ、ね

——青空が正常って訳でもあるまい。青空が100日続けば、同じことを言うかい？

——縁起でもない

——絶対、雨よりも青空だわ

——結局、なにもなかったのかしら

都市は、夏の光のなかでとびつきり美しく見えた。影たちも戻ってきた。おそらく、雨と青空という言葉が人々の唇にのぼったのは、有史以来、今日が最高だろう。路上で、電車の中で、駅のホームで、会社で、学校で、あらゆる場所で、人と人が顔を合わせば、必ずそこに、雨と青空という